

## 辻の地藏さんのおかげ（大川瀬）

摂津と播磨の国境に、ちよつと広い道があります。その三叉路あたりにおられる二つのお地藏さんは、どちらも腰痛を治したり、腰痛にならないようにすると言ひ伝えられています。

むかしむかし、近くの村に、心の優しい働き者の夫婦がおりました。二人は寝る間もおしんで働き、田を耕し、米を作りました。貧しいながらも、三人の子どもと幸せに暮していました。

そんな二人でしたが、年を取った今、悩みの種は「腰いた」でした。若いときから腰を曲げての農作業のせいで、すっかり腰が曲がってしまい、伸ばそうとしても痛いばかりです。田植えのときも、稲刈りのときも、腰を曲げた同じ姿勢ばかりで、特に痛みがひどくなります。夜になつても痛みが引きません。とうとう二人の身の文は、若かつたときの半分ほどにもなつてしまつたのでした。

「腰がつらいねえ。」

「ほうじゃね。腰痛さえましになつてくれたら、もっと

精出して働けるのにねえ。」

痛む腰を曲げながらも田植え仕事の準備に精を出す二人の姿を見ていた子どもたちは、何とかしてあげたいと考えていました。

「もうすぐ田植えだね。」

「どうにかして父さん母さんを楽にしてあげたいものだ。」

「そうだ。辻の地藏さんに何かをお供えして、頼んでみよう。」

兄は町で働いてかせいだお金の中からいくらかを、弟は父母を手伝って作った野菜など七色のものを用意しました。妹はお供えできるものがなかつたので、川へ行つてきれいな石を探しました。丸くて透きとおるように光る、小さなめずらしい石です。それを川の水でよく洗つて持つてかえつてきました。

六月六日、三人はそろつて辻の地藏さんに出かけました。地藏さんは優しくほほえんでいました。

「どうか、父さん、母さんの腰痛を治してください。」

「前のように田んぼ仕事が楽にできるようになってください。」



三人は心をこめてお願いし、おさいせん、七色のもの、洗った小石をお供えしたのでした。  
するとどうしたことでしょう。

つぎの日に夫婦の腰の痛みが和らぎました。そのつぎの日には、夫婦の腰が少しのびました。そのまたつぎの日にはまた少しのびました。

こうして一週間もすると二人の腰痛は消え、腰ものびて、若いときのように田植えに精を出すことができるようになったのです。

「ありがたい。ありがたい。」

子どもたちと夫婦は、手を取り喜びあつたのでした。

そんな夫婦を見た村人たちも、この地蔵さんにお参りするようになりました。みんなそれぞれに心づくしのお供えを用意しました。三人の子どもたちも習って「おさいせん」「七色のもの」「洗った小石」をお供えしました。

だんだんお参りする人が増え、六月六日の地蔵祭りは盛大な祭りとなりました。お地蔵さんの前には、色旗が立ち、露店ろてんもできました。また、万歳まんざいやなにわ節といった芸人を呼び、にぎやかな縁日となったそうです。

今でもこの二つのお地蔵さんには花が供えられ、時にはよだれかけが新しいものに取りかえられて、大切にされています。